

# 安心の医療と

## 信頼の交流に向けて

自治体病院の再編成問題など地域を取り巻く医療環境は厳しく、根室の医療の中核となる市立根室病院においても医師不足は深刻な問題となっています。

平成19年4月には常勤医師が6名となり、夜間救急外来は救急車による重症患者を除き、休診を余儀なく実施しなければならない状況となりました。

その後、札幌医科大学各内科学講座、地域医療総合医学講座などの協力で、常勤医師の当直業務の負担軽減を図り、また、外科常勤医師が不在となった4月以降は、姉妹都市黒部市民病院、国立病院機構、昭和大学等の応援で診療を行いました。現在は、常勤医師10名、準常勤医師と短期出張医師による診療が行なわれています。

今も医師不在となっている整形外科、産婦人科の常勤化を目指すとともに、内科や外科の診療体制充実のため、長谷川市長を先頭に3医学大学、北海道等への要請活動は続けられています。

そのような中、平成19年10月には市民と根室市の医師と市民の交流を図る「ねむろ医心伝信ネットワーク会議」が設立され、地域をあげて「安心して受けられる地元での医療」に向けての活動が展開されています。

市立根室病院の担う役割は大きく、そこに勤務する医師による「市民講座」「糖尿病教室」の開催など、予防医療にも力を注ぎながら市民との交流の機会を設けることは、「確かな信頼」と「安心の医療」に継がれることは間違いありません。

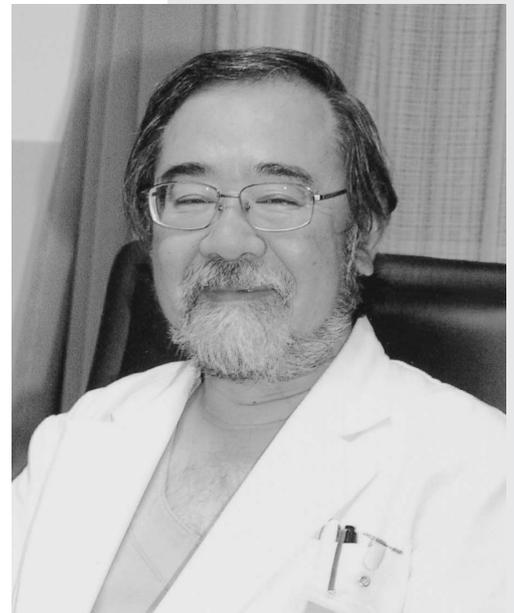
現在、市立根室病院を支える常勤医師10名とともに、私たち根室市民が求める「根室の明日の医療」を見つめてみましょう。

## 祈り

外来の窓を開ける。途端に冷たい空気が体にまとわりつく。体を締めながら、消防署の屋根の向こうに広がる黒ずんだ青さの冬のオホーツクを眺める。目の前に浮かぶ国後島の霞んだ鳥影。その南端の泊山のなだらかな裾野が、黒いナイフとなって根室海峡に突き刺さる。

そう、此処は国境の街。今の根室の全てが、この風景の中に凝縮されている。政治も漁業も、そして我々の市立病院さえも。

思えば、僕が初めて暖房と患者さんの熱気でこった返す病院の玄関を通った時、やがて病院を飲み込むことになる大津波は、既に根室に向かって押し寄せ始めていた。秋にやって来た小さな波は、未だ序の口だった。今年の春に病院を襲った未曾有の大津波は、病院の医師を根こそぎ巻



市立根室病院  
あら かわ まさ のり 憲 院長  
荒 川 政

泌尿器科

北海道大学卒

所属学会等

- 日本泌尿器科学会専門医
- 北海道大学泌尿器科学教室在籍

き込んで沖に連れ去った。いや、医師だけではない。看護師や検査技師、レントゲン技師などのパラメディカルスタッフさえも。  
大津波が退いた跡に残されたのは、小児科の副院長と僕の二人……。  
仮にも人口三万の地方都市の市立病院で、こんな事があるのだろうか。いや、あっても良いのだろうか。  
その大津波の被害は、瞬く間にマスコミで日本中に喧伝され、その結果多くの人々が根室に関心を持った。勿論その中には地域医療に興味を持つ医師達もいた。  
そして、根室のために頑張ろうという医師達が少しずつ集まり始めている。今は未ださざ波かも知れないが、それがやがては大きな津波となつて、今度は多くの医師を根室に運んで来て欲しい。